「教職ボランティア入門」実施報告

南　　伸昌・浅川　邦彦・川上　　貴・石塚　　諭・久保田善彦

宇都宮大学教育学部教育実践紀要　第6号　別刷

2019年8月9日

宇都宮大学教育学部教育実践紀要　第6号　2019年8月9日

「教職ボランティア入門」実施報告†

南　　伸昌*・浅川　邦彦*・川上　　貴*・石塚　　諭*・久保田善彦*
宇都宮大学教育学部*

宇都宮大学教育学部の教育実践科目改革の柱の1つとして，平成30年度より2年次の1年間を通じて小学校で活動する「教職ボランティア入門」を導入した。導入前年度から関係の大学教員だけでなく，宇都宮市小学校長会，県内教育委員会の協力を得ながら準備を進めた。その経緯や，学生へのアンケート調査結果などから見えてきた成果と課題について報告する。

キーワード：教育実習前体験，学校ボランティア，子ども対応，教員との協働

1. はじめに

宇都宮大学教育学部では，従来2年次に公立小中学校での体験活動3日間を含む教育実習Ⅰを行い，3年次の教育実習Ⅱへのステップとしていた。しかし，3日間の体験では学校に慣れ始めたところで終了すること，教育実習Ⅱまでの1年間でその印象が薄れてしまうこと，学校現場の業務を増やしてしまうことなどの課題が挙げられていた。また，教育実習Ⅱ受講開始後に不適応を起こす学生が一定の割合で存在することから，大学での学びと教育実習とを滑らかに接続する必要性が高まっていた。

教育実習Ⅱにおいて教職志向が低下する学生は，そうでない学生に比べると実習中の子ども対応や教員，教生との人間関係に難しさを覚える割合が高い傾向がある。[1] そこで，教育実習改革の柱の1つとして，年間を通じて小学校に関わることにより，子ども対応や教員と連携することに慣れる「教職ボランティア入門」を，2年次に導入することとし，先行事例の調査を行ってきた。[2] そして，もう1つの柱として，弘前大学などの事例を参考に，[3] 教育実習Ⅱ前後の附属学校園における定期的な活動として新「教育実習Ⅰ」を位置付け，実習への滑らかな接続と効果的な振り返りが実現できるようにカリキュラムをデザインした。

本報告では，「教職ボランティア入門」の活動内容や活動を通じた学生の成長，小学校との連携の深化，次年度に向けての課題を，アンケートや聞き取り調査の結果から整理して報告する。なお，調査ごとに数値に若干のズレがあるが，調査時点での回収率等に依るものである。

2. 授業のねらいと実施体制

本授業のねらいを以下の枠内に記す。

- 学校現場において子どもと触れ合うことに慣れ，教員と一緒に子どもの成長に携わる経験を積む。
- 長期的に子どもたちの変化・成長に寄り添うことにより，各人の「教育的愛情」を新たにする。

年間を通じて学校との関わりを保つために，単位認定は30時間としたが，推奨60時間，上限80時間という活動時間の目安を示した。また，本授業は選択科目であるが，教育実習前の現場体験という位置付けもあり，原則受講するよう指導した。

授業の企画・運営は，教育実践専門委員会と地域連携専門委員会の担当委員が中心になって行い，教職センター，1，2年クラス担任が学校対応を，2年担任が学生対応を分担した。

3. 準備及び実施のスケジュール

募集開始から活動終了までの流れを表1に示す。まず，小学校の行事予定を考え，派遣開始を5月中旬とした。派遣名簿作成に数週間かかることが見込

---

† Nobumasa MINAMI*, Kunihiko ASAKAWA*, Takashi KAWAKAMI*, Satoshi ISHIZUKA* and Yoshihiko KUBOTA*: A practice report of “Introduction to school volunteer”
Keywords: Experience before student teaching, School volunteer, Correspondence for the child, Collaboration with teachers
* School of Education, Utsunomiya University
（連絡先：minami@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

まれたため，募集締め切りを4月20日とし，募集案内を前年度に早めることとした。前年度10月から宇都宮市校長会や宇都宮市教育委員会とその段取りについて打合せを行い，11月の宇都宮市小学校長会地区別研修会で改革の方針と授業の概要説明を，2月の宇都宮市小学校長会議で募集案内を行った。

表1　年間スケジュール

前年度2月・・・募集開始	
4月	ガイダンス，講話，実技系事前講習会 募集締め切り → 派遣名簿作成
5月	配属説明会 → 派遣開始
8月	前期活動状況調査（学生，派遣校教員）
9月	全体振り返り，中間講習会 アンケート調査
12月	クラスごとの振り返り，活動状況調査（学生） アンケート調査
2月	教職ボランティア入門意見交換会
～3月・・・活動終了	

宇都宮市内公立小からの申込は32校，140名程度だったので，30名程度を県内母校と附属小学校に派遣することとした。その際，関係教育委員会等との相談に時間を要したが，5月7日の配属説明会までに派遣名簿を作成することができた。

派遣開始前指導として，「子どもとの関わり方」，「教育法規」，「支援を要する児童への対応」の講話を行い，理科，音楽，図工，体育，家庭科の実技講習を行った。また，派遣開始後の指導としては，9月と12月に振り返りの機会を設けた。

9月の振り返りは委員が担当し，全体活動として実施した。事前にクラス担任を通じて学生の活動時間や活動回数を集約し，派遣校教員から活動状況を伺った。振り返りでは，それらを基に必要性の高い情報提供や講話を行い，学生間の活動状況の共有を行った。12月の振り返りはクラス活動とし，活動の終え方の指示，活動の共有，活動状況調査を行った。両振り返りの際にアンケート調査を実施し，活動内容や学生なりの評価や感想，教職志向などについて集約した。

活動の締めくくりとして，2月8日に「教職ボランティア入門」意見交換会を開催した。小学校教員4名，大学1年生17名，2年生13名，大学教員9名の計43名により，様々な視点からの情報共有が行われた。多くの学生は1月までに活動を終了したが，一部の学生は3月まで活動を継続した。

4. 派遣状況と活動内容

全体の派遣状況を表2に，宇都宮市内公立小への学生派遣数分布を表3に記す。

表2　全体の派遣状況

	派遣校数	派遣学生数	母校（内数）
宇都宮市内	公立小 31	133	13
	附属小 1	6	0
栃木県内	公立小 24	29	29
合計	56	168	42

表3　宇都宮市内公立小への派遣学生数分布

派遣学生数	1	2	3	4	5	6	7	8	10	16
学校数	4	12	3	2	1	1	1	3	3	1

宇都宮市内小学校31校中，4割弱の12校が2名派遣で，4名以下が3分の2を占めていた。一方，8名以上の大人数派遣も7校あり，16名派遣した学校もあった。栃木県内小学校は全て母校で，それぞれ1～2名の派遣であった。

学生の移動手段は，自転車81，自家用車28，大学のバス26，公共の交通機関20，その他9であった。大学から5 kmまでの小学校へは原則自転車で移動することとし，遠方の小学校は車を使える学生にお願いした。また，大学から7～10 kmの小学校3校については，まとまった人数の希望があったこともあり，大学のバスを運行して移動の便宜を図った。

平成31年1月時点での活動時間の分布を図1に，活動回数の分布を図2に示す。活動時間の平均は54.3時間で，ほぼ全員が30時間以上活動しており，7割以上が40時間以上活動していた。上限としていた80時間を超えた学生が1割以上いた。

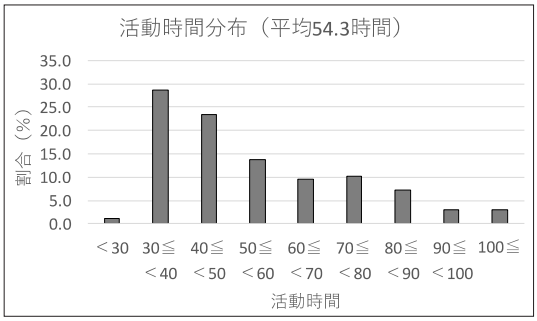

図1　活動時間分布

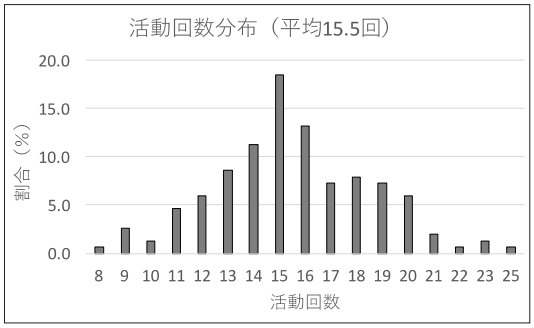

図２　活動回数分布

活動回数の平均は15.5回で，15回が最も多かった。20回以上の学生は1割程度であった。

学生が行った主な活動内容を以下の枠内に記し，それぞれを体験した学生の割合を図3に示す。

①普通学級での授業補助　②普通学級での個別支援　③特別支援学級補助　④プール指導　⑤実験・実技（プール以外）補助　⑥休み時間対応　⑦給食補助　⑧清掃活動　⑨校外学習引率　⑩運動会等行事支援　⑪資料準備　⑫学校の環境整備（美化，補修作業等）

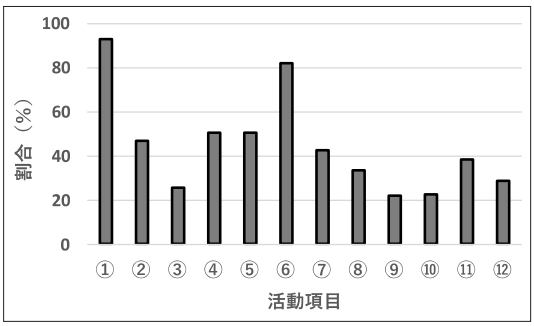

図３　各活動を体験した割合

「普通学級での授業補助」，「休み時間対応」は8～9割の学生が体験していた。実技指導補助など，学校ごとに必要とされるところに配置された様子が伺え，「特別支援学級補助」や「校外学習引率」なども2割程度の学生が体験できていた。

5. 学生の受け止め方

1年間の活動について，学生に以下の枠内に示す8項目について，とてもそう思う／そう思う／そう思わない／全くそう思わないの，4択の質問調査を行った。その結果を整理したものを図4に示す。

①1年間継続して活動することには負担も感じたと思いますが，それ以上のやりがいを感じられましたか。
②授業中の子ども対応に慣れましたか。
③休み時間等授業以外の時間における子ども対応に慣れましたか。
④先生とのコミュニケーションは問題なく取れるようになりましたか。
⑤教育実習に向けて有意義な体験を積めましたか。
⑥学校で子どもたちと関わることに喜びを感じましたか。
⑦教職ボランティア入門を受講する前は，教職に就きたいと思っていましたか。
⑧教職ボランティア入門を体験した今，教職に就きたいと思いますか。

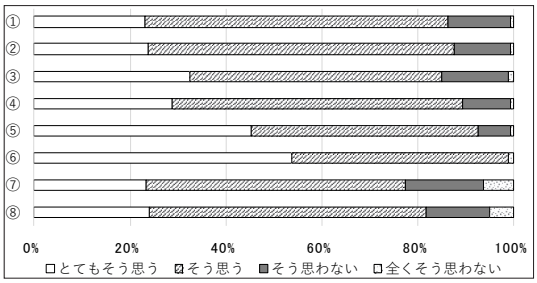

図４　アンケート調査結果

①～⑥の全項目について肯定的な回答が85％以上で，特に「⑥子どもと関わることに喜びを感じた」割合は99％であった。また，学生の教職志向は，活動前（⑦）が77％，活動後（⑧）が81％と，活動を通じて上昇していた。

12月のアンケートの自由記述では，3分の1程度の学生の記入があった。そのうち6割には授業運営に対する不満が述べられており，「同じ授業なのに人／学校によって活動時間が異なる」ということにストレスを感じている学生が多数いた。また，移動時間及びその扱いに対する不満，大学教員の指示に一貫性が感じられないなどの不満，学校／子ども対応で困ったことなどが目に付いた。

意見交換会に参加した学生の主な意見を以下の枠内に記す。

・活動を始める前は不安や不満もあったが，取り組んでいく中で愛着ややりがいが生まれてきた。
・授業支援や子どもとの関わり方など，教育実習前の貴重な経験となった。
・教科教育法で学んだ（学んでいる）内容の実践の場として有効であった。
・1日の活動の流れについて，おおまかな所は一緒かもしれないが，学校によって具体的な活動は異なるので，適宜対応する。

・子どもとのコミュニケーションの取り方について不安があったが，一年間を通して，子どもの違い，変化を知りながら関わってみることで分かってくることがある。
・やりがいはあり，きつい部分を含めて経験してみる，と捉えることで前に向ける。
・私は充実した体験ができたが，学校によって差があるという現実もあるようだ。

学校による体験の違いを指摘する声は一定数あったが，1年間継続することで初めて見えてくるものに気付いたという意見が多かった。

6. 小学校教員の受け止め方

学生が活動を終えた後，派遣校教員の意見を伺った。初年度ということもあり，活動当初は戸惑うことも多かったようであるが，学生の活動については全体的に好意的に受け止めていただき，継続や拡充を望む声を多数いただいた。ただ，一部ではあるが，学生の活動に対する取り組み姿勢やマナー，事前指導の内容についてのご意見もいただいた。2月の意見交換会でいただいた主なご意見を，以下の枠内に記す。

・教職ボランティア入門の仕組みについて，小学校の方の理解も進んだので，次年度はよりスムーズな運営ができるだろう。
・1日2時間でも構わないから，長期に渡って確実に来てくれる方が有り難い。
・活動に関する説明（時間，保険等）は，学校の担当者にはほとんど伝わっていなかった。来年度は最初から有効に活用できると思う。
・1年生が多数参加して理解を深められたので，来年度はスムーズに活動を始められるのでは。

7. 活動を振り返って

本授業では，教育的愛情を深め教職志向を高めることが，大きなねらいであった。アンケート調査の結果からは，ほぼ全員が子どもとの関わりに喜びを感じており，活動後に教職志向の高まりも見られ，ねらい通りの成果を上げたと言える。ただ，教員希望は活動後でも81％であり，より一層の向上のためには新たな方策を検討する必要があることも分かった。

学生によって居住地域や派遣校，各自のスケジュールは異なる。また，学校によって活動内容や時間は異なるので，活動時間は下限のみ設定し，上限の目安は示したが学生の裁量に任せた。しかし，自身の活動に満足しているにも拘わらず，他の学校での活動との違いに違和感を訴えるなど，学生には「同じ授業なのに活動時間や活動内容に差がある」ということに対する違和感／不公平感が強かったようだ。この反応の強さは予想以上であったが，次年度は活動時間や学校での活動に関する説明を丁寧に行い，このような不満が出ないように気を配りたい。

本授業は選択科目ではあるが，原則受講するよう指導したところ，必修科目と勘違いした学生もいた。また，活動時間で30時間の下限，60時間の推奨，80時間の上限を示したところ，単位認定の時間を60時間と誤認する事例が散見された。このような勘違いは，大学の担当教員にも見られ，結果として教員によって指示内容が異なり，学生に不信感を抱かせることとなった。初年度ということで，学生だけでなく教員側の理解も不十分な面があったが，今年度の経験を踏まえ，次年度は共通理解を深められるよう進めていきたい。

本授業は今年度からの新たな取り組みであり，活動開始当初は小学校，大学双方で戸惑うことも多く，試行錯誤の連続であった。しかし，多数の大学教員の協力の下，臨機応変に対応を進め，宇都宮市小学校長会とも連携しながら相互理解を深め，1年間継続することができた。前述のような不満を感じながらも，活動を通じて多くの学生は，教育実習に向けて大変良い事前体験ができ，年間を通じて関わる意義を見いだせたようだ。小学校からも「大変有り難かった」，「次年度はもっと人数を増やして欲しい」という意見をいただき，本活動が小学校と大学双方にとってWin-Winの関係であったと言える。次年度は今年度の経験を元に活動を始めることができ，先輩から後輩への情報伝達もできる環境が育ってきたので，活動のより一層の拡充を図っていきたい。

参考文献

1）南伸昌，日本教育大学協会研究年報，第37集，pp.83-93（2019）.
2）南伸昌，他，教育実践研究，第31集，pp.14-15（2018）.
3）遠藤孝夫，他，教員養成学の誕生　弘前大学教育学部の挑戦，東信堂（2007）.

平成31年3月29日 受理

A practice report of “Introduction to school volunteer”

Nobumasa MINAMI, Kunihiko ASAKAWA, Takashi KAWAKAMI,
Satoshi ISHIZUKA, Yoshihiko KUBOTA